四子は今いずこに在りや?」

〔臣は〕答えて言わく、「雪山の北、舎夷(Śākya-sanda)林に近きところに在りて、城〔市〕を築きて〔都〕邑を営みて、人民熾盛にして、地は〔肥〕沃にして野は豊かにして、衣食は乏しきことなし」。王は聞いて三歎すらく、「わが子らは能あり」。かくのごとく三歎して、これより遂に号して釈迦(Śākya,「能ある者」の意)の種〔族〕と為せり。』(『五分律』第一五巻)[24]

シャカ族はバラモン教の伝統を奉じていなかったので、一般バラモンたちの眼から見ると、野卑な異様な人々と映じていた。コーサラ国のアンバッタという青年バラモンは釈尊に向かって次のように呼びかけている。

『「ゴータマよ。シャカ族の生まれの人々は粗暴である。シャカ族の生まれの人々は粗野である。シャカ族の生まれの人々は軽はずみである。シャカ族の人々は狂暴である。隷属している者でありながら、バラモンたちを崇めず、重んぜず、敬わず、供養せず、尊ばない。これらのシャカ族が、隷属している者でありながら、バラモンたちを崇めず、重んぜず、敬わず、供養せず、尊ばないということは、適当でなく、ふさわしくない」と。青年バラモン・アンバッタはこのように最初に、シャカ族に対して貶したことばをなげかけた。』(*D.N.* III, 1, 12. vol. 1, pp. 90-91)[25]

シャカ族はバラモンの権威を無視し、他方バラモンたちはシャカ族を軽蔑していた。

『〔バラモン青年であるアンバッタはいった、〕「ここに四つの階級(vaṇṇa)がある。王族とバラモンと庶民と隷民とである。[26] これらの四つの階級のうちで王族と庶民と隷民という三つの階級は

ひとえにバラモンにのみ奉仕する者となっている。ところがこのシャカ族が隷属している者でありながらバラモンたちを崇めず、重んぜず、敬わず、供養せず、尊ばないということは、適当でなく、ふさわしくない」と。このようにアンバッタは三たび、シャカ族に対して貶したことばをなげかけた。』(*D.N.* III, 1, 15. vol. 1, pp. 91-92)

このシャカ族は一種の共和政治を実施していた。かれらの首都カピラヴァットゥには公会堂があった。たまたま一人のバラモンがそこにいたったところ、そこでは数多のシャカ族の諸王と諸王子とが高い座に坐してめいめいくすぐり、笑いざわめき、たわむれていたので、そのバラモンは自分を嘲笑したのだと解した、という話が、仏典に伝えられている(*D.N.* III, 1, 13. vol. 1, p. 91)。この〈公会堂〉(santhāgāra)というのは、王室の会議にはけっして用いられることのない名称である。だからシャカ族は共和制を実施していたのである。ブッダがさとりを開いてのちに、故郷に帰ったときにも、シャカ族の貴族たちは公会堂で政治を議していたことがしるされている。[27] のちにカピラヴァットゥのシャカ族が新たに公会堂を建てて、新築のその公会堂にブッダならびにその弟子たちを迎え入れて、そこで説法をしてもらったということも伝えられている。[28] またパーヴァーに住むマッラ族はウッバタカ(Ubbhataka)という名の公会堂を新たに建てたときに、まず最初に釈尊に臨場することを請うた。[29] さらにヴィドゥーダバ将軍は母の故郷であるシャカ族の国へ行ったが、母の素姓が卑しかったために軽蔑され、公会堂でかれの坐した腰掛けは穢れたと見なされ、かれは憤慨したという話が伝えられている。[30] 当時の公会堂は身分の高い貴族だけの集まるものであったことが解る。晩年にブッダは共和